

## 航空需要、回復の見込みは 「ビジネス客の戻りに遅れ」

2020/12/22 2:00 | 日本経済新聞 電子版

新型コロナウイルスが猛威を振るい、多くの人にとって空の旅が縁遠くなった。欧米で始まったワクチン接種で客足は戻るのか。世界の航空会社が加盟する業界団体・国際航空運送協会（IATA）のアレクサンドル・ドウ・ジュニアック事務総長兼最高経営責任者（CEO）に聞いた。



Alexandre de Juniac エールフランスKLMの会長兼CEOからIATAに転じた。フランス出身。（写真はIATA提供）

——激減した航空需要はワクチンで復活しますか。

「空の旅が大きく伸びるようであれば、世界景気も力強く回復する。ただワクチンを人口のかなりの割合に接種するのは2021年下半期になるだろう。だとすれば21年は業界全体でまだ損失が出る。自主隔離などの制限があり、規制も国・地域ごとにばらばら。これは特に国際線に打撃となる。コロナ前の売り上げを回復するのは23～24年だ。短距離フライトは恐らく23年、長距離便は24年になるとみている」

——消費者の意識が変わり、飛ぶことへの意欲が薄れていませんか。

「ポスト・コロナになれば『飛びたい』という気持ちが戻らと思う。だが私的な旅、例えばレジャーは高い伸びとなるものの、ビジネス需要の回復は遅れる。理由は3つある。まず企業が出張予算を大幅に削った。次に急速に普及したビデオ会議システムなどが対面協議を部分的に代替するようになった。そして数千人が参加するような大規模な会議が（延期や中止で）消えた」

——感染リスクなどを考えると、いまは安心して飛ぶことができません。

「申し訳ないが、その意見には全く同意できない。感染対策を徹底したため、これまでに機内でウイルスに感染した例は50人程度。外で雷に打たれるリスクと比べることができるくらい確率が低い。（いまは空港内の店舗の多くが休業中だが、各国政府などが）移動制限を緩めれば乗客が空港に戻ってくる。そうすれば、たちまち店舗なども再び営業を始める」

——乗客が戻れば再び感染が広がりますか。

「我々は安全対策なしに旅行制限を緩めるべきだと考えているわけではない。乗客を体系的に検査し、空港のセキュリティーチェックを通過できるのは陰性の人だけにする。それならウイルスが拡散する恐れは非常に小さい。社会的距離を保ち、マスクを着用するなどの対策も維持すべきだ」

——多くの航空会社が政府支援を受けました。市場原理に背いているのでは。

「その指摘はよく耳にする。しかし今回は予測不能な例外的な状況にある。ビジネスモデルや財務状況が悪かったわけでも、航空券の価格設定に失敗したわけでもない。しかも空路は景気回復のためにも、交通手段を維持するためにも欠くことができない。今後8～10カ月は政府の支えが必要になる」

——英国が欧州連合（EU）から離脱し、いまは通商交渉が大詰めです。

「英国がEUから抜けたのが悪いニュースだ。（16年の英国民投票から）4年間も議論してきたので、言うべきことはあまり残っていない。私はヨーロッパ人として、英国が離脱を選んだことに悲しみを感ずる。EUに不満があろうとなかろうと、EUが航空業界にとってプラスであることは間違いない」

（欧州総局編集委員 赤川省吾）